

2006年 6月18日(日) — 第1回 —

JAなすの(黒磯) 田んぼの生きもの調査



天然のカモも舞い降りる
那須野の田んぼ

調査日時：2006年6月18日

参加人数：35名

参加団体：生活クラブ生協2家族7名、美土里ネット2名、どではら会(生産者)24名、JAなすの2名

調査地点：那珂川河畔公園隣接の減農薬栽培田・生協との交流田(どではら会の塩井勲一さんが借地)

調査項目：生息環境調査、カエル調査、イトミミズ・ユスリカ調査、コドラート調査

減農薬で草が増えても収量が減らなければ・・・

イトミミズやユスリカの数が増えたと聞かれる6月に調査を行なったJAなすの。残念ながらイトミミズやユスリカは少数しかみつきませんでした。「那珂川の冷たい清流を田んぼに入れ、砂地のためイトミミズが増えにくいのかもかもしれません」(インストラクターの林鷹央)。調査ほ場の田主、JAなすの(どではら会)の山口勉さんは、「米ぬかを撒くなど、もっと工夫が必要」と語っていました。

山口さんは減農薬を始めて3年目。「タガメやタニシ、ヤゴ、去年見られなかった虫も見つかった」と生きものの変化も実感はじめています。

今回の調査ほ場は生協との交流田です。JAなすの(どではら会)では、消費者との交流を大切に、今後も環境保全型農業を進めていく方針です。除草剤を抑えた田んぼでは「オモダカなど特定の雑草が残ってしまいます。地元の農家から、どではら会の田んぼは雑草が出ている、と言われても、収量に影響しなければ気にしません」(山口さん)。

どではら会のメンバーの多くは大規模農家ですが、米価も安定せず厳しい時代が続きます。産直活動を通じた安定取引が、生産者のくらしや産地の環境、手間のかかる減農薬栽培を支えています。

JAなすの(黒磯)

産地紹介：1992年から生活クラブ生協と産直活動を続けるJAなすの管内で、有機栽培等を進める生産者が集まり「どではら会」を結成。99年からは「深水栽培」など黒磯の気候風土に合った農法を研究し、農薬を県の慣行栽培の半分に抑える「どではら基準」を設けている。消費者との交流を重視し、現在は30名近い生産者が活動。

主な出荷銘柄：コシヒカリ



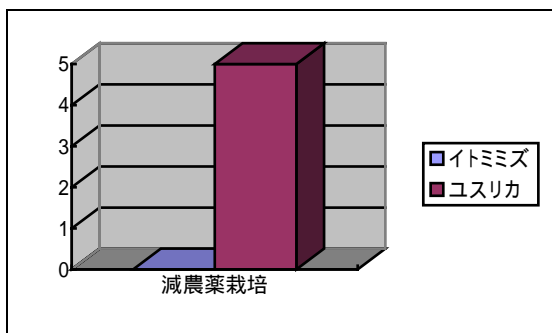
結果発表！

	調査項目	減農薬栽培
土のなかの生きもの調査 (10aあたり匹)	イトミミズ	0万
	ユスリカ(幼虫)	5万
生息環境調査	調査時刻	11:00
	天気	曇り
	風	弱い
	気温()	19.7
	水温()	25.0
	水深(cm)	24.0
	pH(酸度)	8.97/7.04
	EC(電気伝導度、mS)	0.035
	DO(溶存酸素量、mV/l)	9.34
ORP(酸化還元電位、mV)	-40	

* pH値は左から水面下1cm/泥表面



イトミミズはどこ? と懸命に探すが.....



見つかった生きものたち

減農薬栽培田・コドラート(10aあたり): センチュウ 3万 3,333、ミジンコ 3万、ゴマフガムシ幼虫 1万 3,333、ヤゴ 3,333、ヒラマキミズマイマイ 3,333

同・カエル(100mあたり): ニホンアカガエル 135、トウキョウダルマガエル 8.6

データを読む！ 林 鷹央さん

<生息環境調査> 水質は生きものが生息する上でよいと思います。水深は浅めでしたが、6月に水位が下がると、オタマジャクシが日干しになってしまいますので、配慮が必要です。

<イトミミズ・ユスリカ調査> イトミミズは見つかりませんでした。有機物の少ないきれいな山水を入れ、ORPが高く砂が多いため、イトミミズの生息に向いていないのかもしれませんが。米ぬかなど、イトミミズ以外の抑草法の確立も必要になるでしょう。

<カエル調査> ニホンアカガエルが189匹も見つかりました。昨年より生きものに対する意識が高まり、生産者たちは、カエルだけでなくモンシロチョウやシマヘビまで数えていました。消費者と生産者の間に、生きものという損得勘定抜きが存在があることは大変素晴らしいことだと感じました。